

Title	山と水：上代文化の研究に対する一視点としての
Sub Title	The order of nature : an approach to the study of ancient culture of Japan
Author	浅子, 勝二郎(Asako, Katsujiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.3 (1957. 12) ,p.1(269)- 20(288)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19571200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山と水

——上代文化の研究に對する一視點としての——

淺子勝二郎

はしがき

部落の共同體は基本的には山と水の二つの自然的な立地條件によつて結ばれたもので、これは自然の秩序としての世界極端にいえば歴史以前の世界といつてもよいかも知れない。この自然的な條件に基礎をおいた關係は、過去においてそうであつたように現在においても多く變ることなくそうなのである。

「村の記録」には滋賀縣蒲生郡市原村大字上二俣の部落の雨乞に因む一つの風習——おこると雨をふらせる神に對してその最も忌むところの不淨を敢てし、蛙・蛇・猫・鼠等の死骸を弄びなどしてあらん限りの侮辱を與える——を語っている。ある早魃の年のこと若い人妻の髑髏を掘り出してきた青年があつた。この場合人間の死體は猫や鼠のそれと全く同じで、ただ雨の神をおこらすことができればそれでこと足りるのである。著者は「白い齒のそろっている若い佛は、ここ數年來そう幾體も葬つてはないし、それに髑髏は黒い幾筋かの毛髪をまつわらせていたのである。ある人はこれは誰々の嫌にちがいない、出ッ齒に覺えがあるといつて顔を掩うた……雨をよび、稻をよみがえらせるためには人生

永遠の靜寂を破ることぐらひは、もののかずではないのである」と記してをられる。

さてこういった部落の事情はわが上代の歴史にもこれを見るのであって、例えば歴代の帝都の地は淀川の流域をいわず、これは都城の造營のための良材を可及的に近隣の山々にもとめて、これを水上に輸送せざるを得なかつたという一面の事情を物語るもので、つまり帝都の立地条件の一つとして運材に便利な河川に近いこと、しかもその河川が良材に恵まれた山林に連るといふ自然的な條件が要求されたわけで、ここに筆者がわが上代文化の構造を具體的に解明する方法として山と水の問題にする所以があるのである。

なおつぎに水上輸送の一二の例について一言し、あわせて筆者の歴史の研究に對する基本的な態度を表明しておきたいと思う。

岩波寫眞文庫の「埼玉縣」にはその昔新河岸川を江戸に米を運んだ舟が、淺くなつた川床になかば埋れてその殘骸を曝しているのが見える。また横濱市港北區新羽町（にっぽ）所在の西方寺の本堂は、寺傳によれば北條氏の滅亡後鎌倉の極樂寺の一塔頭たりしものを解體して海に浮べ、さらに鶴見川を遡って現在の地に移建されたものであるという。

昔は河川も重要な道路であつた。今となつては考えにくいようなことも、古くは生々しい現實であつた場合も往々にしてあり得るのである。

過去の理解には現實に即きながら離れ、離れながら即くことが必要なのではなからうか。

さて運材の勞苦を物語る一挿話(こ)から出發しよう。

信州飯田市の郊外風越山の頂に白山社の奥社が祀られている。この本殿の建築は室町様式を傳えているが、從來天正二十年の棟札を最古のものとしてその室町時代建立を實證する資料を缺いていた。ところが昭和十四年七月から翌十五年までの解體修理の際、向拜の實肘木の裏側に「六番柱上永正六年八月□日」とある墨書銘が発見され、ここにはじめてその様式手法の示す通り、室町時代建立の建築であることが判明したのである。ところでさらに解體を進めたところ、本殿背面の柱の下部即ち床下の見えないところに

盆遊ニ尋出申候座光寺村善六參ル 此柱壹本無御座候故大島古町デ買申候大島村才乘之人尋出求之 天龍川壹本ながしニ仕迷惑千萬くくなり

と記す墨書が発見された。しかしこれには年月がないから、その棟札によって寛永・寛文・貞享・寶永・享保・明和・文化・天保等の諸期に行われたことが知られる修理の何れの時のものであるかを明にし得ないが、その柱の材質等から恐らく享保以後と推定されるという。

この墨書の意味は修理に當って柱一本分の材料に不足し盆踊に出かけた時、大島古町の材木屋で手頃なのを見つけたが一本だけなので桴に組むこともできず、一本流しに天龍川をおろして現地に運んだが厄介至極のことであったという

のであろうが、これをことさらに人目にふれないところに秘めているところに、封建社會における弱者の聲がきこえてまことに興味深いものがある。

二

「日本書紀」神代卷の一書には「杉及び櫟樟、此の兩樹は以て浮寶と爲すべし、檜は以て瑞宮を爲るべき材とすべし、椈は以て顯見蒼生の奥津棄戸に將臥さむ具に爲すべし」(岩波文庫本による)と見えているが、「以て浮寶と爲すべし」は船材に適する意であり、「瑞宮を爲るべき材」は建築材、「顯見蒼生の奥津棄戸に將臥さむ具」は棺材であろうから、書紀神代卷は杉・櫟樟・檜・椈を有用四樹種として規定し、正に適材を適所においている形である。ついでながら記紀にあらわれる樹種は五十三、二十七科四十屬に及んでいる。

ところで船材としてのスギ・クスノキ、建築材としてのヒノキはしばらくおき、棺材としてのマキについていささか考察してみたいと思う。

尾中文彦氏の研究^(三)によれば、コウヤマキで作られた木棺が近畿地方の數ヶ所の古墳から出土しているとのことであり、これは書紀の記載と一致して興味深い(數ヶ所の古墳とは滋賀縣栗太郡治田村所在安養寺古墳、大阪府枚方市所在御殿山古墳、京都府南桑田郡篠村所在淨土寺古墳等である)

さてここでさらに興味のあることは、朝鮮全羅北道益山郡八峰面石旺里古墳、忠清南道扶餘陵山里所在の歴代百濟王の陵墓と傳えられる所謂五陵出土の棺材が主としてコウヤマキで、その十五例に及ぶことが尾中氏の鑑定^(四)の結果明にさ

れたことで、しかも本材は本邦特産の一科一屬一種の樹種であるから、當然本邦から輸送されたものと考えなければならぬ。筆者はさきにコウヤマキの棺材が近畿地方の數ヶ所の古墳から出土している事實を述べたが、當時日鮮間の密接な交渉が文献上からも容認されるとすれば、この疑は必ずしも不當ではないと思われる。

三

俗に「京の着倒れ大阪の食倒れ」というたとえがあるが、これは京都は古來立派な織物の産地として美服を身に纏う機會の多いこと、また大阪は所謂關西料理の本場として美食を貪るもの多いことを諷刺したものである。

中國にこれとはやや趣を異にするが大體似たようなことで、杭州・蘇州・上海地方に行われている言葉がある。即ちそれは「生在蘇州 住在杭州 食在廣州 死在柳州」というのである。この意味は蘇州のような美人の産地で生れ、西湖を中心とした自然公園のような杭州に住み、食うには米の本場廣州がよく、死ぬのは良好な棺材の出る廣西省の柳州がよいというのであろう。わが着倒れ食倒れという單なる江戸趣味的諷刺に比して、如何にも大陸的な悠々たる氣分が漂っていて面白い。

しかしここで問題は「死在柳州」であつて、中國人は古來棺材に深い關心をもっていたということである。然らば如何なる材質のものが棺材として特に選ばれたのであろうか。

レヴィ・ブリュルはその著「未開社會の思惟」^(五)に「……したがっていま我々が論じている信仰はシナで、棺用には一番硬い木、或はむしろ常綠樹の木材を求めるといふ信仰に類するものである。こんな木は生命の元素をより多く含み、そ

して棺の内の死體にその力を伝える。これは、他でも多く出逢う接触による融即の一例である」と記し、さらに氏はまた黄金と黒玉とは何時までもそのままの物質であるとして、フロートの著書から「それは不變、不壞、不滅で腐ることのない天球の象徴である。その結果黄金、黒玉（眞珠も）はそれを嚙んだ人の活力を増大する。換言すれば、天と同じく陽 yang である「神氣」(shen)の強さを増大する。これらの物は死者を腐敗から防ぎ再生を容易ならしめる。」^(七)「道士や醫書の作者は、黄金や黒玉や眞珠を嚙んだ者は長命となるばかりでなく、死後肉體を腐敗から救い、屍の保存を確實にすると稱している。この教義が存在するということだけでも、これら著者の精神のうちでは、このような物質を嚙下して不死となつた仙人 sien は死後もその肉體を使いつづけ、神々の世界に肉體と共に移住するという内容を含んでいる。これは古代にも現代にも有りふれた、死者の口なり他の體孔に三種の貴重物を入れて屍を腐敗から守るという習俗に、新しい光明を投げかける。即ち、これは神仙となす企てであつた。」^(八)と引用を重ねているが、この黄金が死者を腐敗から防ぎ再生を容易ならしめるという信仰と連關して、「隋書」列傳に興味ある記載がある。

貴人死。剝_ニ取皮_一以_ニ金屑_一和_ニ骨肉_一。置_ニ於瓶内_一而埋_レ之

とあるのがそれである。

ところでブリュルの記述や「隋書」列傳の記載によって窺い得るところは、永久不變の太陽の象徴である黄金も強い生命力を思わせる硬木や常緑樹で作った棺も等しく死者に活力を與え、その腐敗を防ぎ、永遠の生命を持続し得るといふ信仰であろう。

然らばこの信仰は果して如何なる棺材の材種に連るのであるうか。しばらくこの問題について考察したいと思う。

中國で厚葬の風が行われたのは漢代以前からのことで、石棺は多く用いられず主として木棺が行われたが、その材種が精選されたことはいうまでもない。東京大學文學部が大正十四年に樂浪の一古墳を發掘した際四個の完全な木棺が發見されたが、それらの棺材は何れもカシワであった。漢代ではカシワが棺材として最も多く用いられ、殊にその芯部の黄腸を選んだことが「漢書」霍光傳(十一)に見えているが、特に樹脂分に富み容易に腐朽し難い芯部を選んだところに意味があるようである。しかしカシワは朝鮮に産しないから中國から輸送されたものであろうといわれている。また樂浪出土の棺材にはクスノキもあり、これについても往時南朝鮮にクスノキを産したのであろうから、その材を用いたのであるとも或はクスノキは朝鮮や中國でも北部にはなく江南に多いからその地方から齎されたものであろうともいわれているが、この棺材に對しては適切な説明を與える一資料があるのである。それは王充・仲長統とならんで後漢の三賢といわれる王符が、儒教主義の政治論を以て時の弊政を論じた「潜夫論」第三卷に「浮修第十二」なる一篇(十二)があり、これは彼が當時上下の奢侈甚しきを慨歎した文章である。即ち

其後京師貴戚必欲江南檣梓豫章榿柟、邊遠下土亦競相倣效……東至樂浪西至敦煌、萬里之中相競用之とあるのがそれである。

ところで檣(みろ)・梓(きさ)・豫章(くす)・榿(くぬぎ)・柟(くす)等の諸材が果して今日われわれが當てているところと同じものであるかどうかは疑問であるが、豫章がクスノキであることは問題ないと思う。兎に角後漢時代に洛陽の貴族富豪はいうまでもなく、僻遠の地にまでも江南の棺材がもとめられたのである。「潜夫論」に「東至樂浪西至敦煌」と記されているということは偶々樂浪出土の棺材の産地を物語るものにほかならない。また莫大な努力と費用を要する棺の作成が王符の攻撃の目標に

なったのも當然であり、しかも贅を盡して敢てこれを行っていたところに漢代厚葬の盛風を想察し得るのである。

なお「潛夫論」には棺材の發見、伐材、運材等についての勞苦も記されていて、彼我その軌を一にするものがあるのは面白い。

四

樂浪は江南の地にもその棺材を得たとすれば、わがコウヤマキが百濟王の陵墓にその棺材となつて發見されても何等異とするに足りないが、ここでまたコウヤマキの材質が問題になるのである。^(十三)これは果して棺材として適切なものであろうか。以下少しくこれについて考察したいと思う。

コウヤマキは前述の如く本邦特産の一科一屬一種の樹種で、材質輕軟にして耐水濕性に富み、桶材・船材・橋梁材として重用される。またこれと材質の類似しているクサマキも同様耐水濕性に富み、ほぼ同様の用途を有する樹種である。

マキは古文献に椀・麻紀・奔紀・眞木等と記されているが、これが果してコウヤマキを指すものであるか或はまたクサマキを指すものであるか明でないが、新井白石の「東雅」^(十四)にもまたこれとほとんど同時代にできた寺島良安の「和漢三才圖會」^(十五)にも兩者の耐水濕的特性を強調し、水容器、船、棺等の用材として優秀なる所以を説いてをり、恐らく兩者は古くから嚴密な區別なく、マキと併稱されていたのではなからうかと思われる。

さて書紀が乾濕の反復による狂が極めて少く、土中における耐久力の強い優れた材質を有するコウヤマキを特に棺材

として規定しているということは、われわれの祖先が古くから一般材質について相等深い認識をもっていたことを物語るものであって、しかもそのコウヤマキが朝鮮にも連關しているということは文化史的に頗る興味深いことである。

五

前述の如く書紀に「檜は以て瑞宮を爲るべき材とすべし」と見える瑞宮を爲るべき材は建築材の意であろうが、その伐材・運材の状況は如何なるものであつたらうか。

棺の作製にもその過程を通じて莫大な労力と費用を要したことは「潛夫論」の記載について一言ふれるところがあつたが、建築の場合もその前史に伐材・運材等の苦役が秘められていることを、まず「萬葉集」卷一「藤原宮の役民の作れる歌」として傳えられる長歌によって偲びたい。

それは近江の田上山から伐り出した材を山谷の大戸川に浮べ、それを宇治川に流し、それが木津川と合流する地點即ち八幡の附近から方向を變えて木津川を遡り、木津に陸揚して奈良に運び、再び佐保川に浮べて藤原京に送ったことを思わせるのであるがここで一應疑問になるのは、何故に遠く近江に材をもとめなければならなかつたかということである。吉野を中心とする大和中原の森林はどうなつていたのであるか。飛鳥時代の大建築事業は大和中原の森林濫伐を敢てしたのであろうと疑う向もあるが、果して當時既に大和中原に良材が乏しかつたのであろうか。この問に答えることは容易でない。ただ現在は法隆寺の古材に關する専門家の研究——その用材は近畿地方から得たと推定されるという程度の結論で満足しなければならない。

さて「元亨釋書」卷二十八に石山寺の創立に關する一傳説(十七)が語られている。それは聖武天皇が東大寺の大佛を鑄造されたが、その鍍金の料に悩み、良辨僧正に大和の金峰山に金を得るよう傳えられた。彼は金峰山に入って金剛藏王に祈ったところが、藏王の夢告があつて、近江の勢多で如意輪觀音に待つようにとのことであつた。僧正は大石に坐して釣する老翁の姿の比良明神にその地の觀音の靈區なるを教えられ、そこに廬を結んで如意輪觀音を祀ったところが、間もなく奥州貢金のことがあつた云々というのであるが、要するに石山寺の草創に因んで、東大寺大佛の鍍金の料を奥州に得るに至つた事情を物語つた傳説にすぎず、石山に祀られた如意輪觀音(像容金色といわれる)、金剛藏王(金峰山に祀られていた)、執金剛神も金との結びつきは全く皮相的なものであるが、しかし東大寺と石山寺の間には何等かの歴史的關係のありしやを疑わしめるものがあるのである。(二十)

東大寺創建當初の用材が何れの地から得られたかを明示することは困難であるが、まず伊賀の黒田杣、近江の中賀山・高島山と推定して大過なきものと思われる。また俊乘坊重源による再興の際は伊賀及び周防が用材の供給地であつたと考えられる。

ところで天平度の用材の供給地甲賀山は甲賀郡の中央部から伊賀境に近い地域を總稱したものらしく、「大日本古文學」卷十五所收「正倉院文書」には、天平寶字六年二月五日付の「造甲賀山作所所解」及び同年三月三十日付の「山作所作物雜工散役帳」なるものがあつて、その前者に甲賀山作材について「自木本運車庭材木」後者に「自木本運川津材」なる記載があり、これによって杣山から伐採された材木はそこ(木本)から雇夫の切り開いた材引道を引きおろされ、車庭(車に積む處)から川のほとり即ち川津(河津)に運ばれたことがわかる。前掲の天平寶字六年三月三十日付の

文書に見える川津は、同年二月十日付の「造石山寺所錢米充用注文」に

奉充錢拾陸貫貳伯拾壹文

三貫二百一十一文、自矢川津運漕於石山津、桴工百六十九人功料（下略）

とあるところから矢川津と推定される。矢川は深川に接し、また深川の川尻は野洲川に流れこむので、矢川津の運漕上の價值は高く、そこから石山津までの運漕の桴工の功料が算出されていることは、木本から車庭まで搬出され、さらにそこから車に積んで、矢川津へ運ばれた材木が、そこで桴に組まれて野洲川を下り、湖上を石山津へ運漕されたことを物語るものである。矢川津の附近一帯は柚莊とも寺莊ともいわれているが、これはそれぞれ伊賀山を控えた東大寺領、東大寺々領莊園の意であろう。

一方高島山の木材は、天平寶字六年九月九日の「榎樽漕運功錢米注文」^{（下略）}によって小川津から本流へ流し、湖上勢多に至り、勢多川をくだって宇治に達し、宇治川を淀にでて八幡附近で木津川に入って木津に運漕されたことがわかる。

小川津は恐らく現在の朽木村大字小川に當るものと思われるが、ここは高島第一の長流阿曇川の支流に臨む小村である。

甲賀山・高島山の木材は、およそかくの如き徑路によって奈良に送られたものであろうが、勢多は野洲川をくだって湖上にでる甲賀山の木材と阿曇川を下して湖上に浮べる高島山の木材が等しく向い集る重要な地點で、恐らくそこで裝を新にして奈良に送られたものであろう。

成程大佛の鍍金の料としての金を得ることは東大寺の側として重大な關心事であつたろうが、壯麗な建築の用材に對

してはそれに劣らず善處を怠らなかつたと考えられる。その建築用材の來り集る要地としての勢多に、その加護によつて運材の功を全うするための佛を祀ることも極めて自然の成行で、石山寺の造營は天平寶字六年以後であるとしても、その草創の根據は實にこの點にもとめられるのではなからうかと思う。なお石山寺造營の木材は近江の田上山・甲賀山・高島山等にもとめられたが、その輸送の徑路が藤原宮、東大寺の場合と同様であつたことはいうまでもない。

ここに甲賀山に連關して、現甲賀郡岩根村所在の善水寺の草創に因む寺傳がある。それは延暦年間最澄が比叡山に根本中堂を建立しようとした時偶々旱魃で、岩根山に得た用材を水に浮べることができなかつたので、最澄は當山に登つて百傳池ももこのいけにおいて請雨法を修したところ、河水満々として材悉く板本に着したといふのであるが、この寺傳も前述の如く野洲川をくだして湖上にでる甲賀山の木材の輸送徑路を物語っている。

六

さて材はこれを近きにもとめるを得策とするはいうまでもないが、藤原宮の造營、東大寺建立に際しては早くも良材の供給地は近江伊賀に退き、俊乗坊重源による東大寺再建の場合においては遙に遠く周防國にその用材をもとめたのである。これには東大寺がさきに朝廷から周防國を寄進(二十二)されていたという事情にもよろうが、奈良・平安の時代を経てようやく都に近く木材に不足をきたしたためであろう。

ところで遠隔の地から木材を輸送するとなれば、その困難また一入であるが、一方それに對して新方法が考案されることも當然で、その事情は「玉葉」(二十三)、「東大寺造立供養記」(二十四)によつて明である。即ちそれは輻輳を引重機として使用して

いることである。

さて木材輸送の情況については「東大寺造立供養記」に詳述されているが、これによってその水陸兩路における方法を知ることができるのである。即ちまず伐採した木材を轆轤によつて深谷から所謂杣出しして木津に集め、水の浅い佐波川に百十八ヶ所の堰を設けて水を湛え、その一隅に新に流材道を開いて海に通じ、瀬戸内海から淀川・木津川を経て奈良へ送っているのであるが、この間桴に組み或は船に繋ぎ、幾多の困難を凌いでその功を成していることを知るのである。東大寺俊乘堂に日本彫刻史上最もすぐれた肖像彫刻の一つである重源上人像が安置されているが、東大寺再建に盡瘁した高僧の不屈の面魂が偲ばれて興趣最も深いものがある。

ところで「東大寺造立供養記」に見られる木材の輸送方法は、その供給地が遠隔の地であり、さらには重源が現在われわれが當時の遺構としての南大門に見る如き天竺様の巨大な建築を構想した關係上大材をもとめただけに、轆轤の使用等藤原宮造營の際の方法に比して大規模なものであつたろうと思われる。ただ木材の水上輸送方法は江戸時代においても大差はなかつたものの如く、その好例を明暦二年に再建された妙心寺の法堂の用材輸送の狀況二十五にこれを見ることができるのである。

さて木材の陸上運搬においては、概して杣出法に特殊なものを見るが、平地にては各時代を通じて大力車を用い、それを牛または人にひかせている。「鳥獸戲畫」四卷中の「人物戲畫卷」或は「石山寺縁起繪卷」に見ることのできる棟木引祭圖の如きはその一端を物語る好資料である。しかしわれわれの關心をよぶものは水上輸送の方法であり、これは幾多の變つた方法が考案されていたように思われる。

ここに嘉永七年富田禮彦が編纂し松村寛一が苦心畫圖したものに、「伐木事業一覽圖」・「材木流送圖」の上下二巻が長野營林局に收藏されているが、筆者はまだ披見の機を得ていないので、同局がこれを複写し註釋を加えて、「木曾式伐木運材圖繪」と名づけているものによってその一端にふれてみたいと思う。

まず「伐木事業一覽圖」中「祭山神圖」に

杣人の小屋掛調い山入最初に山神を祀り、常盤木をたて注連繩しめなわを張り、頭分のもの兩三人にて御酒を奉り、材木元伐に懸れるより、かくの如く一ヶ月に一度ずつ不怠御酒おこたらずを奉り日待と唱え通夜するなり

と見え、仕事はじめ前に山の神を祀り、「口開くちあけ」（二二六）といつて仕事に着手しても、毎月日をきめて仕事を休み御祭をする。これを「御日待」というのである。また「株祭之圖」には

樹木伐倒し其の木の梢を打て株にさしたて山神に奉り、其の木の中間を山神より賜るといふ云々

と記され、所謂「鳥總立とびごたて」（二二六）をすることを語つている。これは「萬葉集」卷三・卷十七にも見え、「木きる」の枕詞となつている程である。因に新年の門松をとり去ったあとへ立てておく松の小枝は鳥總松といわれる。

さて木曾では伐採地から適宜の地點に集材することを寄木よせぎといい、以下谷まで搬出することを山落し、川にだすまでを小谷狩、桴ふに組む綱場まで流下することを大川狩とよび、綱場からは桴送ふりぞになるわけである。なお木曾においては木曾川本流まで、飛驒にあっては益田川までを通常小谷狩といつている。

ところで桴ふについてであるが、これにはそのまま水上を行くものと川の中の掛木かかりぎをはずして流下させるための手段として用いられるものがあるが、後者にはさらに小桴と鴨桴がある。「材木流送圖」中「小桴之圖」に

此の桴は木尻に添いて兩岸よりとびさよ鳶竿のとき得ぬ川中の掛木を外し狩流すためとす

と見え、小桴はまた鍋蓋なべがたともいわれ、木數約十二、三本長五尺五寸幅五尺に仕上げ、日雇の技術優秀なる者が乗手、乗手格と稱してこれを専用したとのことである。なお急流難場にかかった多牟波たむな、吹込木を處理することを管狩くだといっている。多牟波というのは相對する岩の間に横さまにかかった材をいうのである。鴨桴はその圖に

長二間材六、七寸角五、六本を藤葛を以て結合せ小桴におなじく木尻に添下りて木をはずし、又日雇人夫などの川越にも用う

と記されている。さらに「切所狩下之圖其の一」に

飛驒國益田郡中切村にて字釜という所川幡狭く中央に大岩立て高さ四、五間ばかり。大瀧あり、川筋第一の切所なり。材木ここに押掛れば、川中の岩に横たえる數千の材木流通る事を得ざる故に兩岸にあさづな苧綱等をさげ、桴を釣りに鳶竿を持って付添居り一本ずつ繰り出し流すなり云々

と見えているようにここでは桴が、掛木をはずすために兩岸から釣りおろされた足場として役立っているのである。

また流木の處理するのにカグラサン(神樂棧、起重機のこと)が使用されたことが「切所掛り木之圖其二・其三」によって明である。即ち

益田川筋にて(美濃國では飛驒川という)美濃國加茂郡加知村のうち咽のどと云う所は、鴨桴、小桴にも乗通る事かなわ
ず、岩石連りて掛り木多し、故に持籠もっこに人夫を入れて釣りさげ、掛木に綱を付けさせ、シャチ、カグラサンにて巻上げ
或は鳶竿にてはずさしむ云々

と記されているのがそれである。所謂小谷狩のみでもかかる労苦をなめたのであるから、運材の功を成すにはまことに想像に餘りあるものがあつたであらう。

最後に檣などの大材を川さげするには、ちきりいかなだ 膝檣を使用したらしく、これは木材の前後左右に五、六寸角二間程のもの十本ぐらいを、ちきり 機具の膝のように藤蔓で所謂いかだぬい 檣縫し大材へ結びつけ、各檣に二人ずつ都合八人がいかだかい 檣機で乗りくだすのである。またつきふね 附舟にはまものづな 轆轤や眞物綱を用意して非常に際に備えたのである。

以上「日本書紀」神代卷の一書に、それぞれ建築材棺材と規定されて文字通り適材適所のヒノキとマキの兩材を中心として、上代文化の様相の一端にふれたのであるが、わが上代文化は一面自然の秩序の中にあつたといつては言いすぎであるかも知れないが、少くとも自然の秩序に近く位置していたことは事實であろうと思われる。われわれは上代文化の構造を具體的に理解するために、この自然の秩序——歴史以前の世界といつてもよいかも知れない——にもっと近づくことが必要なのではなからうか。かくして二十七 ヴィルヘルム・フォン・フンボルトのいつたように歴史の眞理に近づくければならないのではなからうか。

註

- (一) 松好貞夫氏著 就中「共同體の生活と世界」
- (二) 田邊泰氏「國建重修餘談」(冠木門「三七—三〇頁」參照)
- (三) 「古墳其他古代の遺構より出土せる材片に就て」(「日本林學會誌」十八ノ八)
- (四) 梅原末治氏「百濟遺蹟調査の回顧とその新發掘に就いて」(「忠南教育」十所載)のち「東亞考古學論攷」第一所收「扶餘陵山里東古墳群の調

查」(朝鮮古蹟研究会「昭和十二年度古蹟調査報告」所載) 參照

(五) 岩波文庫本 山田吉彦氏譯 本引用は上二七頁

原著名は *Les Fonctions mentales dans les Sociétés inférieures*. par Lévy-Bruhl. Paris, 1910 の「劣等社會における心的機能」と譯すべきものであるが、その内容から便宜的に「未開社會の思惟」としたのである。

(六) J. J. M. de Groot, *The Religious System of China*, i. p. 295.

(七) *Ibid.*, i. p. 271.

(八) *Ibid.*, ii. pp. 331, 332.

(九) 四十八「女國」とある個所、この國は西藏族の一種羌の立てるところといわれているが、この記載は所謂「魏志倭人傳」を思わせるものがあり、女治その他變った習俗を傳えているので、左にそれを要略して掲げる。

女國在葱嶺之南、其國代以女爲王、王姓蘇毗字未羯、在位二十年、女王之夫號曰金聚、不知政事、國內丈夫唯以征伐爲務、山上爲城方五六里、人有萬家、王居九層之樓、侍女數百人、五日一聽朝、復有小女王、共知國政、其俗婦人輕丈夫、而性不妬忌、男女皆以彩色塗面、一日之中或數度變改之、人皆被髮以皮爲鞋、課稅無常、氣候多寒、以射獵爲業(中略)女王死、國中則厚斂金錢、求死者族中五賢女二人、一爲女王、次爲小王、貴人死、剝取皮以金屑和之、置於瓶內而埋之、經一年又以其皮內於鐵器埋之、俗事阿修羅神、又有樹神、才初以人祭、或用獼猴、祭畢入山祝之、有二鳥如雌雄、來集掌上、破其腹而視之、有粟則年豐、沙石則有災、謂之鳥卜、開皇六年遣使朝貢、其後遂絕

(十) 原田淑人氏「漢代の木棺に就いて」(『考古學雜誌』十九ノ七のち「東亞古文化研究」所收) 參照

(十一) 霍光が地節二年(西紀前六十八年)に死んだ時の宣帝の賜物の中に「便房黃腸題湊」の文字が見えている。

(十二) 子曰古之葬者厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹、喪期無時、後世聖人易之以棺槨、桐木爲棺、葛采爲緘、下不及泉、上不泄臭、後世以楸梓槐柏槨、各取一方土所出膠漆所致、釘細腰、削除鏗靡不見際會、其堅足恃、其用足任、如此可矣、其後貴戚必欲江南檉梓豫章榿、邊遠下土亦競相倣、夫檉梓豫章所出殊遠、又乃生於深山窮谷、經

歷山岑、立ニ千歩之高百丈之谿、傾ニ倚險阻、崎嶇不便、求之連日然後見之、伐斫連月然後訖、會衆然後能動擔、牛列然後能致水、漕漬入海、連淮逆河、行數千里然後到雒、工匠彫治稍累日月、計一棺之成功、將千萬夫、既其終用、重且萬斤、非大衆不能舉、非大車不能輓、東至滎浪西至敦煌、萬里之中相競用之、此之費功傷農、可爲痛心。

(十三) これに連關して小原二郎氏「こやまき材の耐水濕的優秀性に就て」(「木材工業」三ノ三) 參照

(十四) 卷十六 本書名は「日東の爾雅」の意で、中國の「爾雅」にならつてわが國の物名を解釋したものである。全二十卷

(十五) 卷八十二 本書は一種の百科辭典ともいふべきものである。全百五卷

(十六) やすみしし 吾大王 高照す 日の皇子 あらたえの 藤原が上に 食國を 見し給わむと 都宮は 高知らさむと 神ながら思ほすなべに 天地も 依りてあれこそ 磬走る 淡海の國の 衣手の 田上山の 眞木さく 檜の孀手を もののふの 八十氏川に 玉藻なす 浮べ流せれ 其を取ると さわぐ御民も 家忘れ 身もたな知らに 鴨じもの 水に浮きいて 吾が 作る 日の御門に 知らぬ國 依り巨勢道ゆ 我が國は 常世にならむ 圖負える 神龜も 新代と いずみの河に 越せる 眞木の孀手を百足 らず筏に作り 浜すらむ 勤はく見れば 神ながらならし (井波文庫本による)

(十七) 栗田郡上田上村地域の山々と推定される。

(十八) 三好東一氏「法隆寺建造古材に就て」(「御料林」九二)

本研究は二十九個の古材について、その樹種の鑑定とその産地年代の推定を行ったものである。

(十九) 石山寺者、聖武帝創ニ東大寺、鑄ニ十有六丈遮那銅像、多聚金爲薄、此時本朝未レ有ニ黄金、帝語ニ良辦法師曰、傳聞、和州金峰山其地皆黄金也、師祈ニ金剛藏王、得レ金資ニ銅像薄、不ニ亦宜ニ乎、辨入ニ金峰山ニ持念、夢、藏王告曰、此山黄金不ニ敢自恣ニ也、今示ニ汝別方、近州湖西勢多縣有ニ一山、如意輪觀自在靈應之地也、汝至レ彼持念、必得ニ黄金、辨便赴ニ勢多、時老翁坐ニ大石上ニ釣レ魚、辨問曰、汝何人、對曰、我是山主比良明神也、此地觀音之靈區、言已不レ見、辨就ニ其石、縛レ盧安ニ如意輪像ニ持誦不レ幾、奥州始貢ニ黄金、爾後刻ニ丈六大悲像ニ藏ニ先像於中、亦造ニ金剛藏王及執金剛神ニ安ニ左右、其像各八尺、當レ夷ニ基趾、地中得ニ五尺寶鐸、益爲ニ靈地。

(二十) 中村直勝氏「天平建築用材の運漕」〔舉樂〕八

福山敏男氏「奈良時代に於ける石山寺の造營」〔日本建築史の研究所所收〕參照

(二十一) 自高島山漕運榑事

合榑榑六百材 漕功錢四貫八百文

自小川津、於宇治津漕榑六百材、功三貫文 三百材、材別三文

自宇治津、於泉津漕六百材、功一貫八百文 材別三文

泉津治直錢十四貫四百文 漕功充 四貫八百文
可殘 九貫六百文

天平寶字六年九月九日

(二十二) 「吾妻鏡」卷七文治二年四月廿三日甲午、周防國者、去年四月五日、爲東大寺造營被寄附之聞……

「玉葉」卷四十五文治二年四月十三日庚申、……以元周防守公基可被任丹波守、周防國一向被付東大寺事……

なを現在防府市の阿彌陀寺には多寶塔が殘されていて、その臺座の銘文に「造東大寺柚初文治二年丙午四月十八日……と見えてゐる。また同寺は東大寺の用材たることを證するために極印をうちつけた鐵印を藏してゐる。

(二十三) 卷第五十一、文治三年十月三日の條

可被付成功事

大佛殿造營之一大事、只在_二柚出_一、巖石嶮岨之路、山谷相交、高下不_レ平也、以_二人力_一不_レ可_レ叶、小小之人勢不_レ可_レ動_二柱一本_一、普通之沙汰にては柱一本夫千餘人、若二三千人數、而重源以_二意巧_一構_二ニロク_一天引_レ之之間、一本別_二不_レ過_二六七十人_一云々、然而九十餘本之柱、其外如_二虹梁折_一之_二大物_一千萬、仍中内之夫功更不_レ可_レ及_二十分之一_一、因之可_レ被_レ付_二成功_一之由、度々受領之功官之功只可_レ隨_レ在也云々

(二十四) 柱一本、長或九丈十丈、或七丈八丈、口徑五尺四五寸也、一本別作法者、建_二轆轤_一二張_二以附_二人夫七十人_一而押_二轆轤_一引_二大綱_一也、綱口六寸、長五十丈也、五十人而持_二舉綱_一一丈也、此綱二筋附_二柱本末_一而引_レ之、若無_二轆轤_一則令_二千餘人_一以引_レ

之、然間或埋_レ數十丈溪_ニ而平_ニ嶮難_ニ或摧_ニ高大礮石_ニ而開_ニ山路_ニ、或截_ニ衆木_ニ而除_ニ荊棘_ニ、或構_ニ大橋_ニ以通_ニ千谷_ニ、嚴寒凌_レ氷以盡_ニ人力_ニ、炎天拭_レ汗以勵_ニ此役_ニ矣、雖_レ有_ニ大材_ニ難_レ得_ニ好木_ニ、雖_レ切_ニ數百本_ニ纔得_ニ十廿本_ニ、所以者、或大木中空損、或節枝多有_レ難也、從_ニ袖中_ニ出_ニ大河_ニ、名曰_ニ佐波川_ニ矣、木津至_レ于_レ海七里三十六町爲_ニ一里_ニ水淺故、柱不_ニ流下_ニ、仍關_レ河而湛_レ水也、七里之間關_レ之之所百十八處也、新堀_ニ於河_ニ通_ニ于江海_ニ、從_ニ四月上旬_ニ至_ニ七月下旬_ニ關_レ之之間、手足爛壞、身力悉費盡畢、凡如_レ此等大事、唯非_ニ一處二處_ニ、既數百處也、唯非_ニ一年二年_ニ、既數十余年也、或東西之峯、或南北之洞、四角八方在_ニ々所_ニ、袖中造_レ道三百町也、筏組之樣非_ニ普通之儀_ニ、依_ニ上人之巧_ニ而操_ニ筏之構_ニ也、以_ニ葛藤_ニ爲_レ綱之間國中葛藤拂底畢、仍往_ニ他國_ニ採_レ之也、筏到來之時、儲_ニ種々構_ニ也、木津河水淺則以_ニ橋船四艘_ニ而附_ニ柱本末_ニ即浮_レ柱之祕術也、到_ニ泉木津_ニ之時、以_ニ大力車_ニ而戴_レ之、懸_ニ牛百廿頭_ニ也、諸宮諸院有緣人々、引_レ柱而著_ニ於寺_ニ也云々

(二十五) 秋島籬島著「都林泉名勝圖會」四

此堂の虹梁は大木の松二本各長さ九間半木口の徑五尺五寸本末等し、日向國よりこれを求む、壹本毎に板をもつて左右に釘し海中に浮め、舟子數十人木の上に在て櫓を搖し又左右に船を浮めてこれを繋ぎ順風に任せて大阪の河口に入津す、これより淀川を引登り、淀の城下より車に乗せて一材毎に牛七十頭をもつて鳥羽より大宮を北に向う、時の所司代板倉伊賀侯の許可をうけて二條城の馬場を南下、立賣より妙心寺に至る……京師町小路の老若これを見んとて群をなす事夥し其大材の上に在る木遣の音頭の者を三三郎といういまだ少年なれども美麗の音聲を出して人夫を勇しむ因之遲滞なく安々と運送す云々

(二十六)

鳥總^{とがさた}立て足柄山に船木^{ふねぎ}伐り樹に伐り行きつあたら船木^{ふねぎ}を

鳥總^{とがさた}立て船木^{ふねぎ}伐るといふ能登の島山今日見れば木立^{たぢ}繁しも幾代神^{かむ}びぞ

(二十七) Wilhelm von Humboldt, Über die Aufgabe des Geschichtschreibers.

西村貞二氏譯「歴史家の課題について」(創元社哲學叢書所收「フンボルト歴史哲學論文集」一五七一―一五七五頁)參照